

会社の年末手当回答に対する抗議声明

J R東労組は、新型コロナウイルスの感染症拡大で会社が赤字経営を余儀なくされている現実を踏まえた上で、組合員がコロナ感染のリスクを背負いながらも黒字経営のために一生懸命奮闘する労苦に報いるために、年末手当2.7ヶ月+5万円の要求を掲げ、組合員と共にたたかい抜いてきた。

この2.7ヶ月+5万円要求は、物価が上昇する中で年収が大幅に減収し、ローンの支払いや生活給に充てる年末手当が減額されれば生活できないという組合員の声と、生活実感ならびに労働実感に基づく切実な要求である。

しかし、会社は11月11日、年末手当2.0ヶ月という昨年よりも低額な回答を各組合に提示した。

J R東労組は本日、リモート参加も含め緊急集会を開催した。緊急集会において、本部は4点の問題意識を打ち出した。

1. 職場の努力に報いた回答ではない
2. 私たちの生活実態に重きをおいた回答ではない
3. 昨年の年末手当2.2ヶ月から2.0ヶ月下がるのは理解できない
4. 賞与削減ありきの姿勢ではないか

まさしく、本部が示した4点の問題意識は職場の組合員の切実な「声」である。

会社は、通期業績見通しを赤字へと下方修正した。現下の経営状況の厳しさは受け止める。私たちはコロナ禍によって待遇が悪化していることだけを問題にしているわけではない。厳しい状況だからこそ、社員に未来を示すのが経営陣の役割ではないのか。賞与のカットを喜々としてマスコミに語っている場合ではない。深沢社長は「目標を下半期の黒字に切り替えてあきらめることなくみんなで頑張っていきましょう」と呼びかけた。

しかし、上期の損失より通期の損失が増加するとの予想を立てたのはなぜなのか？あきらめているのは誰だ？これでは頑張れない！！

夏季手当や年末手当だけではない！

定期昇給のカットも然り。「変革のスピードアップ」も然り。現場の納得感も無いまま矢継ぎ早に施策が打たれているが、この構造改革の先には何があるのか。効率化が進められ、「働き度」だけが上げられて終わりなのか。構造改革の成果が経営に独り占めされかねない不信感が募る。社員（組合員）には、未来が、光が見えない。我々は低額の数字だけではなく、経営陣の姿勢に対しても我々は断固抗議する。

よって、J R東労組本部に要請する！

本部は私たち現場組合員の声を受け止め、再度会社に向かって挑むべきである。

組合員と社員にとって年末手当は、「やる気」の源泉である。会社はそのことを肝に銘じるべきである。私たちはJ R東日本の発展と組合員と家族の利益を守りぬくために、これからも職場から断固たたかう。

2021年11月11日
東日本旅客鉄道労働組合
東京地方本部